

平成二十八年年度

和歌山信愛中学校

入学試験問題 前期日程

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～19ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

問一 次の——線部①～③の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、——線部④～⑧のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 山々が連なる。
 ② 祖父の遺産を相續する。
 ③ 消息を絶つ。
 ④ プロ野球がかいまくする。
 ⑤ 祖母のかんびようをする。
 ⑥ ぎやくてんで勝利を収める。
 ⑦ 被災地のふつこうを支える。
 ⑧ スギの木はじょうりよくじゆだ。

問二 次の語の中から、文法的にはかと性質の異なるものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ①
 ア たのしい
 イ はかない
 ウ ねらい
 エ つまらない

- ②
 ア 静かだ
 イ 本番だ
 ウ 親切だ
 エ 元気だ

- ③
 ア 汗あせだく
 イ はたらく
 ウ 動く
 エ 休む

- ④
 ア きつと
 イ とても
 ウ いきなり
 エ あらゆる

問三 次のことわざと意味の近い熟語を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 転ばぬ先の杖つえ
- ② 虫の知らせ
- ③ さるも木から落ちる
- ④ 棚たなからぼたもち
- ⑤ 飛んで火に入る夏の虫

ア 幸運 イ 自滅めつ ウ 予感 エ 油断 オ 用心

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 哺乳動物のウシやヒツジなどのウシ科の野生種は、新生代の中新生（約二三〇〇万年前～約五〇〇万年前）に、西アジアに登場してきます。

② 約一万年前に氷河期が終わり、地球が温暖化していく中で、人はやがて農耕を始めるようになります。そして、これらの野生の哺乳動物を家畜化していきます。時代はずっと下がって、紀元前八七〇〇～八五〇〇年です。ここに、野生の動物を狩猟し、その肉を食べる生活から、家畜を飼って肉を得るとい生活に変化したわけです。人類の誕生が七〇〇万年前、家畜化が約一万年前ですから、人類の歴史から見ると、① ほんのつい最近のことです。

③ 野生の哺乳動物は地球上に現在、約四三〇〇種から約四六〇〇種いるとされています。このうち、家畜となったのは約二〇種程度にすぎません。ウサギ、オオカミ（イヌ）、ネコ、ウマ、イノシシ（ブタ）、ラクダ、トナカイ、ウシ、ヒツジ、ヤギなどです。多くは乾燥帯に適した動物たちです。これらの家畜化された動物たちのうちで、ウマ科、ラクダ科、ウシ科の動物たちには、たくさん個体が集まって群れをなすという共通の性質が備わっています。これらの動物に群れをなす性質があったからこそ、多頭数で飼うことができ、まとまった食料が期待できたのです。そして、どちらかという気性がおとなしい性質が家畜には認められます。人は② このような動物の特質を巧みに利用することで、よりよき牧野に家畜を導くことができました。また、搾乳や休息のために家畜をコントロールし、まとまった食料を得ることもできました。

④ ただ ③ イヌは群れをなしません。イヌの祖先はオオカミであり、極めて④ 獠猛な動物です。人はオオカミを食料生産のためには利用しませんでした。ユーラシア大陸からアフリカ大陸にかけて、牧民のテントを訪ねると、きまってイヌに激しく吠えまわらせてしまいます。人や家畜に危害を加えるような他者を遠のけるために、イヌを家畜として飼い、その獠猛性を利用したのです。また、北アジアではウマが騎乗用に、西アジアからアフリカにかけてはロバが運搬や騎乗用に主に用いられています。ウマ科の動

物は脚力が発達していますから、移動速度も速く、家畜化していくのには相当な困難が伴ったことでしょう。しかし、人は逆にこの脚力を生活に利用したのです。

⑤ 野生動物を家畜化すると、人は長年の時をかけて都合のよいように改良していきます。I 身体のサイズは、管理し易いように、たいていは小型化します。II 家畜が大きいままだと、暴れた際など、人の生命さえも危ぶまれるからです。毛色は人の

好みによって突然変異種が選ばれ、野生種には見られないような多様な色調と模様が現れるようになります。野生種のオオカミと家畜種のイヌを比べると、その多様さの違いが明らかです。角は一般的には小さくなり、蹄も退化していきます。III、食料

生産に有利なように動物を改良してきた経緯上、より多くの子ども（子畜）を産むようになり、体重の増加率は向上し、※泌乳量が驚異的に増加します。家畜は人の管理下にあるだけに、野生動物と比べると、よりひ弱で従順になりますが、食料生産の面では優れているのです。

⑥ やがて、人は家畜からミルクを搾るようになります。今からおおよそ八〇〇〇年から九〇〇〇年前のことです。動物のミルクを搾って利用しているのは、哺乳類約四三〇〇〜四六〇〇種類の中で人のみです。もともと、母は自らの子のみを育てるために大量の血液を使い、ミルクを生産しているのです。それを横取りして利用するなんて、とても珍しく巧みな技術を人は発明したことになります。

⑦ 西アジアや北アジアなど赤道付近から離れた地域では、ウシやヒツジなどの家畜は基本的に一年に一度、子を一、二頭しか生ましません。子を産み、家畜個体を増やしていくためには極めて非効率です。単に肉を得るだけならば、苦労して家畜を飼育するよりも、野生動物を狩猟するほうが効率的であったことでしょう。また家畜を飼うということは、飼料を一年を通して確保しなければなりません。春から夏にかけては、家畜を草地で放牧させていけばいいのですが、草資源が乏しくなる秋から冬にかけては、飼料を確保・保存しておいて、家畜に与えることが必要となってきます。つまり、肉を食べることが目的ならば、わざわざ労力を費やしてまで家畜を飼う必要はなく、野生動物を狩猟すれば多くの必要が満たされていた可能性が高いのです。

⑧ それでも、なぜ、人は効率的ではない家畜を飼おうとしたのでしょうか。

⑨ フィールドワークでアラブ系などの牧畜民と生活を共にしていると、牧畜民が肉を食べるのは祝い事やお客さんを迎えた時くらいで、日常ではほとんど食べていません。ケニアのトゥルカナ牧畜民やマサイ遊牧民の事例では、食料の約六〇%もミルクに依存しています。日常の食料の半分以上がミルクなのですから、驚きです。これらの事例は、ミルクに多くを依存して生活が成り立っていることを実際にしめています。家畜を殺して肉を食料とすると、家畜の数は減少します。それに対して、ミルクを利用するというのは、家畜の数を保ちながら食料を得るという生存戦略です。家畜を生かし留め、ミルクを利用するという視点は、肉利用とはまったく異なった戦略なのです。こうして人は初めて家畜から食料を定期的に得ることが可能となったわけです。

⑩ ミルクの利用は単なる食料獲得だけではなく、⑤ 家畜の群れを管理するための重要な技術にも関わってきました。たとえばウシなら、ミルクを搾るために、母子を分離し、別々の群れにして放牧します。子ウシに口かせを付けて、ミルクを飲ませないようにすることもあります。本来は我が子のように許すはずの哺乳を他種の動物（人）が搾乳できるようになるためには、催乳などミルクを「だまして横取り」するための技術が必要となります。催乳とは、何らかの技術を用いて母ウシの泌乳を促進させる技術のことです。子ウシに最初一分ほど哺乳させます。母ウシは、自分の子を匂いと鳴き声で認識し、受容し、哺乳を始めるのです。その後、子ウシを乳房から引き離し、母ウシの近くに子ウシを留めながら、人がミルクを搾り取るのです。さらにミルクをより多く得るためには、妊娠・出産・泌乳する雌をできるだけ多く飼うことが望まれます。より多くのミルクを出す雌も選ばれていきます。雄は、種をつけるための限られた頭数で十分ですから、多くの雄は生後間もなく間引かれる、もしくは、※ 去勢されることとなります。去勢されると、雄畜同士の争いがなくなり、群れとしてのまとまりが良くなります。

⑪ このように、より多くのミルクを得るためには、群れの構造や管理、哺乳の抑制、搾乳するための諸技術、優秀な家畜の選抜までもが必要となり、搾乳は牧畜の本質に関わってくる重要な生産活動となっているのです。ミルクを利用することで、人は新しい食料獲得方法と家畜管理法を生み出し、家畜に生活の多くを全面的に依存できるようになりました。ミルクという食料の安定的

な確保によって、より乾燥した厳しい地域にも進出して生活できるようにもなり、生活圏の拡大をも人類にもたらしました。搾乳の発見と乳利用が人類の生活に革命をもたらしたといえましょう。

(平田 昌弘 まさひろ 『人とミルクの二万年』より)

注 ※ 泌乳：・母乳を出すこと。

※ 去勢：・子どもを作るために必要な体の機能を失わせること。

問一 ——線部①について、ということが「ほんのつい最近のこと」なのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ウシやヒツジが西アジアに登場したこと。
- イ 人が農耕を始めたこと。
- ウ 氷河期が終わり、地球が温暖化したこと。
- エ 人が狩猟生活を始めたこと。
- オ 人が家畜を飼い始めたこと。

問二 ——線部②「このような動物の特質」とはどのような特質ですか。本文中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問三 ――線部③「イヌ」は何のために家畜として飼われたのですか。本文中から二十五字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四

I

III

 にあてはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度以上使ってははいけません。

- ア たとえば イ つまり ウ 一方 エ なぜなら

問五 ――線部④「なぜ、人は効率的ではない家畜を飼おうとしたのでしょうか」について

- 1 なぜ家畜を飼うことは効率的ではないのですか。本文中の言葉を使って四十五字以内で説明しなさい。
- 2 なぜ人は効率的ではない家畜を飼うのだと考えられますか。本文中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問六 ———線部⑤「家畜の群れを管理するための重要な技術」にあてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子ウシにミルクを飲ませないように、ふだんは母と子を別々の群れにして放牧する。
- イ まず子に少しだけ哺乳させ、それから母と子を引き離してミルクの「だまし取り」をする。
- ウ たくさんミルクを出す雌を厳選し、できるだけたくさんの雄と交配させて子を増やす。
- エ 雄を去勢することで、雄同士の争いをなくし、群れとしてのまとまりをよくする。
- オ 母の近くに子を留め、匂いと鳴き声を認識させて、泌乳を促進させる「催乳」を行う。

問七 本文中から次の一文がぬけ落ちています。どの段落とどの段落の間に入れるのが適当ですか。段落番号で答えなさい。

人との関係を良好に築けた野生動物だけが、家畜として人の社会に入っていたのです。

問八 本文の内容を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 気候条件の厳しい地域でも生活していくために、人類は搾乳の技術を発明した。
- イ 家畜から乳を搾り、それを食料とすることで、人類の生活圏は大きく広がった。
- ウ 世界中の多くの地域の人々が、日常の食料のほとんどをミルクに依存している。
- エ 他の動物のミルクを横取りして食料としているのは、人間だけとは限らない。
- オ 近年ではできるだけ自然に任せて家畜を飼育し、搾乳する方法がとられている。

【三】 次の文章は、小川洋子の『猫を抱いて象と泳ぐ』の一節です。主人公の「少年」は、「マスター」からチェスを教わり、次に才能を開花させ、強くなつていきます。ある日、デパートで開催されたチェスの大会で優勝し、商品券をもらいました。第一等賞にふさわしい使い方をするように」と祖母から言われていたその商品券で、少年は大人相手に賭けチェスをし、見事に勝利します。そして、もともと持っていた商品券だけでなく、現金も手にしました。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈I〉

少年が生まれて初めて自分の力で稼いだお金は、彼にとってみれば大金だったが、弟の欲しがっている潜水艦のプラモデルを買えるほどではなかった。少年は土曜日のお昼、弟を連れてデパートの食堂へ行き、一緒にお子様ランチを食べた。

祖母には、学校の帰りにマスターの所でご飯をご馳走になるから、と嘘をついた。もちろん嘘をつくのは心が痛んだ。バス代とお子様ランチ代を合わせれば、祖母の分を出すには少し足りないから仕方ないと自分を説得したが、そんなのは言い訳に過ぎないとよく分かっていた。本当は商品券を現金に換えて割り増ししたことが、祖母の言った一等賞の名誉に相応しい使い道かどうか自信が持てなかったのだ。受け取ったお札は砂まみれでざらざらし、お酒のおいが染み付き、何か惨めなもののようにくたびれ果てていた。その感触が、自分のたどった善き道を汚しているのではないだろうか、心のどこかで少年は心配していた。

ただ弟のはしやぎ振りだけが少年の心配を打ち消してくれた。

「わあ、すごいね、お兄ちゃん」

兄の手をきつく握り、弟は何度もそう繰り返した。ショーケースの中に並ぶ料理を、まぶしそうな目で一皿一皿じっくり眺め、あれにしようかこれにしようか散々悩み、結局は最初からの予定通りお子様ランチを選んだ。二人ともデパートの食堂に足を踏み入れるのは初めてだった。中は混雑し、食券売り場の前には行列ができていたが、おかげで小さな子供が二人きりでも目立た

なかった。彼らは窓際の、ちようど※インデイラの立て札が見える席に並んで腰掛けた。

弟は運ばれてきたお子様ランチの一体どこから手を付けていいのか分からないといった様子で目を輝かせ、もう一度、

「すごいね、お兄ちゃん」

と言った。それからまず①チキンライスのてっぺんに刺さった国旗を抜き取り、いとおしそうにズボンのポケットに仕舞った。

「お兄ちゃんのもあげるよ」

少年が皿を差し出すと、弟は弾む声で「ありがとう」を言い、兄の分の国旗をつまんでクルクル回しながら笑った。

「美味しいね、お兄ちゃん」

一口食べるごとに弟は繰り返して、そのつど少年は②相槌を打った。しかし正直なところ少年には、それが本当に美味しいのか

どうかよく分からなかった。チキンライスもハンバーグもフライドポテトもただ、胸の奥に浮かぶ暗闇に吸い込まれてゆくばかりだった。

屋上は子供たちで賑わっていたが、インデイラの立て札は相変わらず淋しげで、少年たちがいつも座るベンチはがらんとしていた。

「いいか、おばあちゃんには黙っているんだぞ」

少年は弟に言い聞かせた。

「今度、チェスでもっとお金をもらえたら、今度はおばあちゃんも、おじいちゃんも一緒に食堂に来られる。その時まで内緒だ。

約束が守れるかい？」

「守れるとも」

弟はフォークの先でエビフライを高々と掲げながら、元気よく答えた。

〈II〉

「賭けチェスをやったんだね、坊や」

賭けチェスが何を意味するのか、少年は正確に理解はしていなかったが、マスターの口調からそれが好ましくないものであり、公園で酔っ払いを相手にしたあのチェスを指しているのだということは、すぐに分かった。

「はい」

少年は素直にうなずいた。

「で、勝ってお金をもらったのかい？」

「はい」

「そうか……」

マスターは無精髭に手をやり、ジヨリジヨリ音をさせながら、^③長いため息をついた。怒っている気配はなかった。むしろ思案に暮れ、弱り果てているように見えた。その様子がいつそう少年を辛い気持ちにさせた。公園で男たちに商品券を差し出し、チェスの勝負をして以降、弟とお子様ランチを食べてもなお消えずに淀み続けているどんよりとした後ろめたさが、いよいよ気持悪く膨らんで少年の胸を押し潰そうとしていた。と同時にどうしてマスターが公園での出来事を知っているのか、やっぱり弟から漏れたのか、その理由についての想像が頭を駆け巡っていた。こっそり仕掛けたつもりの手がやすやすと見破られ、たちまち※チェックメイトされたかのような、惨めな負け方をした気分だった。

マスターは頭をかき、ベルトを引っ張り上げ、食卓に指先で何かわけの分からない模様を書いた。シャツの襟からはみ出した首の肉をつまみ、シュガーポットの中のスプーンをかき回した。そうやって思いつく限りの仕草を一通りやったあと、ようやく口を開いた。

「俺は坊やがチェスでお金を稼いだことを怒っているんじゃない」

視線はシュガーポットに注がれたままだった。

「例えばグランドマスターたちは、素晴らしいチェスをさして、そのご褒美をもらう。それは当然のことだ。盤上に映し出される絵、浮かび上がる詩、響き渡る音には観客は皆拍手喝采を送り、自分たちの感動の何分の一かでも形にしてプレゼントしたいと思う。それがお金だ。分かるかい？」

「うん、分かるよ」

少年の声は震えていた。マスターは砂糖をかき回し続けた。

「でも、公園にいる彼らがやり取りしているお金は、チェスへのご褒美なんかじゃない。単なる金だ。つまりチェスは金を稼ぐための道具に過ぎないんだ。なりふり構わず、手っ取り早く勝つ。それだけが彼らの目的であって、盤上に美しい何かを表現しようなどとはこれっぽっちも思っていない」

ポットの縁から食卓の上に、砂糖粒がパラパラとこぼれ落ちた。

「つまりだ」

マスターは人差し指に砂糖粒を押し付けてなめ、それから視線を少年に移した。

「俺は坊やの駒を、そういう盤上で動かしてもらいたくないんだ。彼らの盤は結局、金を追い求める欲に支配されている。それは相手のキングを倒したいという欲とは、全然種類が違うものなんだよ。いつか話しただろう？ チェスは二人でさすものだ、敵と自分、二人で奏でるものだって。だからいくら坊やの手が澄んでいたって、相手の音が濁っていたら台無しだ。そんなチェスをする坊やを俺は見たくない。坊やなら誰もがはつとして息を呑むようなチェスがさせる。盤上に詩が刻める。それが俺にはよく分かっているから、だから賭けチェスなんか坊やには……」

「分かったよ」

我慢できずに少年はマスターの胸に飛び込んだ。

「もうしないよ。④ あんなチェスは二度としない。ごめんなさい。マスターをがっかりさせるつもりなんてなかったのに、どうしてこんな馬鹿な真似をしてしまったのか……。ごめんなさい。本当にごめんなさい。僕はどうしようもない馬鹿だよ」

少年はマスターのシャツに顔を押し付け、声を上げて泣いた。砂埃でざらざらしていたお札の感触を消そうとするように両手を握り締め、大きな口を開けて泣いた。ずっと胸を塞いでいたものが全部涙になって、後から後からこぼれ落ちてきた。

「坊やは馬鹿なんかじゃあるもんか」

マスターは少年の背中に両腕を回した。

「いいや、違う。馬鹿だ。最低の馬鹿だ。せつかくマスターが教えてくれたチェスなのに……。よく考えもせず……。いい気になって……。せつかくの一等賞……。おばあちゃんがあんなに喜んでくれた一等賞を……。おばあちゃんに内緒で使うなんて……。しかも滅茶苦茶なチェスで……。無理矢理酔っ払いからひったくるみたいにして……。ごめんなさい、マスター。ごめんなさい、おばあちゃん。ごめんなさい」

ひどくしゃくり上げ、言葉は途切れ途切れにしか出てこなかった。最後、ごめんなさいと言ったあと、少年は一段と激しく泣きじゃくり、涙と鼻水でマスターのシャツを濡らした。背中を撫でながら何度もマスターは、「いいんだよ。謝らなくてもいいんだよ」と繰り返し返したが、その口調の優しさがいつそう少年を悲しくさせ、涙をあふれさせた。

「で、お金は何に使ったんだい？」

小さな子供に話し掛けるように、マスターは少年の耳元に顔を寄せた。

「お子様……。ランチ……。デパートの……。弟と……。一緒……」

「おお、そうか。それはよかった。弟も喜んだだろう？ よかった、よかった」

胸もわき腹も下腹も太ももも、マスターの身体は全部が柔らかく温かかった。少年が全身の力を預けても、何の苦もなくゆった

りと受け止めるだけの余裕があった。少年は目を閉じた。その柔らかさとぬくもりの奥には果てがなかった。

⑤ まるでチェスの海に沈んでいるみたいだ。

と、少年は思った。窓の向こうには夕闇が迫ろうとしていた。少年はいつまでもマスターと一緒にこうしていたいと願った。閉じた目からはまだ涙があふれていた。

注 ※ インデイラ：かつてデパートの屋上で飼われていた象の名前。

※ チェックメイト：チェスで勝敗を決める最後の一手。

問一 〓線部 a 「心が痛んだ」、b 「相槌を打った」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えな
わす。

a 「心が痛んだ」

- ア 心臓に痛みを感じた
イ ひどく緊張した
ウ つらくて苦しかった
エ うろたえあわてた

b 「相槌を打った」

- ア 笑顔で応対した
イ うなずいて話を聞いた
ウ テーブルを指で鳴らした
エ 感心して手をたたいた

問二 ―― 線部① 「チキンライスのでっぺんに刺さった国旗を抜き取り、いとおしそうにズボンのポケットに仕舞った」とあり

ますが、このときの弟の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことを思っでパートの食堂へ連れて来てくれた兄への感謝を噛みしめている。

イ 祖父母に内緒で子どもたちだけでパートに来ていたということを、誇らしく思っている。

ウ 食べるのがもったいないので、ひとまず国旗を抜き、何から食べるか迷っている。

エ 目の前のお子様ランチに感激し、国旗を記念として大切に持つておこうと思っている。

オ 今日来られなかった祖父母へのお土産みやげとして、国旗を持つて帰ってあげようと思っている。

問三 ―― 線部② 「少年には、それが本当に美味しいのかどうかよく分からなかった」とありますが、それはなぜですか。その

理由を説明した部分を、「くから」に続く形で本文中から五十五字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四 ——— 線部③ 「長いため息をついた」とありますが、このときのマスターの気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 少年が、自分の知らないところで勝手に賭けチェスをしていたことに対して腹を立てている。

イ 少年が賭けチェスに手を出してしまったのは自分の教え方に原因があると、不甲斐なく思っている。

ウ 賭けチェスをしてまでお金を必要としていた少年のことを思いやっつて、気の毒に思っている。

エ 賭けチェスをしてしまった少年の過ちを、どのようにさとせばよいのか考えあぐねている。

オ 賭けチェスを素直に認めた少年に感心しつつも、それが本当だったと知り、がっかりしている。

問五 ——— 線部④ 「あんなチェス」とはどのようなチェスですか。「くチェス」に続く形で本文中から十六字でぬき出して答えなさい。

問六 マスターが少年に期待しているチェスとはどのようなチェスですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問七 ——— 線部⑤ 「まるでチェスの海に沈んでいるみたいだ」について

1 「まるで……みたいだ」のような^ひ比喩表現を何と言いますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩法 イ 隠喩法^{いん} ウ 擬人法^ぎ エ 倒置法^{たう} オ 対句法^{たい}

2 「チェスの海に沈んでいる」とはどのようなことを表現していると考えられますか。適当なものを次の中から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 何でも見抜いてしまうマスターの^{とう}洞察力の深さ
イ 少年の罪を許してくれたマスターの^{かん}寛容な心
ウ チェスの厳しさを説くマスターの経験の豊かさ
エ 立ち直ることができない少年の落ち込んだ気持ち
オ 尽きることのないチェスの世界の奥深さ
カ 今後果てしなく続く険しいチェスの道

問八 〈Ⅱ〉の場面における「少年」の心情の変化の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 二度とこのようなことはしないと強く心に誓う一方で、マスターになぐさめてもらったことよって、次第に自分の中にあつた罪悪感が少しずつ解消されていき、すがすがしい気持ちになっている。

イ 初めは取り返しのつかないことをしてしまったのだと後悔していたが、マスターから不信感を抱かれていることがわかってとすっかり動揺し、謝罪をすることでその場をうまく取り繕おうと懸命になっている。

ウ 心のどこかで賭けチェスに対する違和感を抱えていたが、マスターと話すうちに、だんだん自分の罪の大きさに気づき、周囲の人々の気持ちを裏切ってしまったと、申し訳ない気持ちでいっぱいになっている。

エ 賭けチェスに対してぼんやりとした後ろめたさを感じていたものの、やがて一方的に自分のことを責めるマスターとの間に大きな心の隔たりを感じ、やり場のないもやもやとした気持ちに苦しんでいる。

オ 賭けチェスをしたことを正直に打ち明けたものの、どうしてマスターが賭けチェスのことを知っているのかという不安で徐々に頭の中がいつぱいになり、自分のしたことがどういふことなのかを受け止めきれずにいる。

《問題はこれで終わりです。》

【一】(31点)

問一	⑤ 看病	① つらなる	⑥ 逆転	② そうぞく	⑦ 復興	③ しょうそく	⑧ 常緑樹	④ 開幕
	各2点	書き	各1点	読み				

問二

① ウ
② イ
③ ア
④ エ

各2点

問三

① オ
② ウ
③ エ
④ ア
⑤ イ

各2点

問一

オ

3点

【二】(38点)

問二

乾 燥 帯 に 適 し 性 た さ ん の 個 体 が 集 ま っ て 群
れ を な し 気 が お と な し い と い う 特 質 。

5点

問三

人 や 家 畜 に け る た め

3点

問四

I ア
II エ
III ウ

各2点

問五

1	一 年 に 一 度 、 子 を 一 年 を 通 し て 確 保 し か 産 ま な い ば な
2	ミ ル ク を 利 用 す る こ と で 、 家 畜 の 数 を 保 ち

5点

問六

ウ

3点

問七

4

段落と

5

段落の間

4点

問八

イ

4点

【三】(31点)

問一

a ウ
b イ

各2点

問二

エ

3点

問三

商 品 券 を 現 貨 と な っ た から

4点

問四

エ

3点

問五

金 を 追 い 求 め る 欲 に 支 配 さ れ て い る チェス

3点

問六

相手のキングを倒したいという気持ちで、盤上に美しい何かを敵と二人で表現し、見ている人々を感動させるようなチェス。

4点

問七

1 ア
2 イ
オ

各2点

問八

ウ

4点

平成二十八年 度

和歌山信愛中学校

入学試験 中期日程

国 語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 問題用紙は1〜18ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を
開いたまま裏返しておきなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～⑧の――線部のひらがなを漢字で書きなさい。

- ① 将来はべんごしになりたい。
- ② 絵画をふくせいする。
- ③ ただちに避難して下さい。
- ④ おうぼうなふるまいだ。
- ⑤ パーティにしようたいする。
- ⑥ むちゆうで走る。
- ⑦ インターネットのこうざいを考える。
- ⑧ しつぎおうとうの時間だ。

問二 次の①～⑤の文の――線部と同じ意味・用法のものをそれぞれア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ① 妹の書いた作文が入賞した。
- ア 人気のない公園は危ない。
ウ どうして遅刻したの。
- イ これはだれの仕業だろう。
エ 考えたのはこの案です。

② 明日は雨になるらしい。

ア めずらしいカブトムシだ。

イ 今日のメニューはハンバーガーらしい。

ウ 食事らしい食事もできない。

エ 中学生らしい生活をする。

③ 悩んでも答えは出なかった。

ア この問題は大人でも難しい。

イ 大声で呼んでも気付かなかった。

ウ あまり積極的でもない。

エ 自転車でもどこでも行ける。

④ ある晩、一人の女が訪ねてきた。

ア 冷蔵庫におやつがあるよ。

イ 母はパティシエである。

ウ 夏のある日のことだった。

エ 和歌山にある世界遺産。

⑤ このままでは地震が来ると危険です。

ア 弟は成長して医者となった。

イ みんながどう思おうと、信念を貫く。

ウ 運動場で友達と遊んだ。

エ よく考えないと、困ったことになるぞ。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

米作が日本で始まって以来、百姓は稲を育ててきました。その歴史を振り返っていたあるときに、はっと気づいたことがあります。①もともと百姓はなぜ「稲植え」と言わずに「田植え」と言ったのか、「稲作」と言わずに「田づくり」と言ったのか、その理由がわかったのです。

現在、稲を育てるといふ営みはどのように考えられているのでしょうか。現代の農業技術は人間が主体で、人間が稲を育てると考えます。これを近代以降に普及した農学の中では「稲作」と表現します。それに対し、百姓は「稲づくり」とは言いません。「稲はつくるものではなく、とれるものだ」と考えていました。しかし、近代の農学が全国に普及した一九七〇年以降は稲も「つくる」と表現するようになっていきます。稲の苗を田に植える行為も、「田植え」という言葉から「稲植え」という言葉に取って代わられてしまうのでしょうか。

近代の農学が普及し、稲作という言葉が広まった現在でも、田に稲を植える行為は、百姓が使っていた「田植え」という言い方が一般的です。これはどういうことなのでしょう。「田植え」という言葉には、稲が育つ過程では、人間が主体ではなく、稲が主体、いや田んぼが主体、いや天地（自然全体）が主体であると百姓が考えたことが反映されています。百姓は「私が植えて育てるんだ」というのではなく、田んぼが自然に稲を育ててくれると考えるのです。したがって、百姓が田植えをするということは、田んぼ（自然）に稲の居場所を確保し、これから天地から、そして田んぼから育ててもらおう準備が整ったという意味なのです。「田を植える」という言葉には、稲を「田に植える」のではなく、「稲を田の一部にする」と考えた百姓の気分がよくあらわれています。

田植えとは百姓が田んぼという自然に入りこみ、一体となって、稲の苗を田の一員にしてもらう儀式だったのです。たんなる農作業ではない証拠に、その苗は「早乙女」が植えないと田んぼと一体になれなかったのです。そういう力は百姓の女の方がまっすぐに考えられてきました。たぶん、女性は子どもを産む力があつたからでしょうか。また、田植えのときにはかならず「田植え歌」が歌われていました。これも、早乙女をよるこばす目的と同時に、田の神にささげられていたものです。

田植えが終わると、もう田んぼから稲だけを取り出せなくなります。稲がない田んぼは、田んぼでなくなるのです。 **A**、
田植えとは、田んぼをほんとうの田んぼにすることでもあったのです。 **②** 田植えによつて、はじめて田んぼが出現するのです。

その証拠に、 **③** 百姓は田植えが終わるとほつとします。田植えとは、一年間続いていく農作業の流れの中の大きな一区切りです。小さな苗を広大な田んぼに一つ一つ手作業で植えていくわけですから、大変な労力を必要とする仕事です。しかしこの安堵は、かけた労力の大小からくるものではありません。百姓は、一生懸命育てた稲を田んぼに植えることで、心の底からほつとするのです。それは大変な仕事をやり終えた安堵というよりも、これで自分の手から稲が巣立っていく、あとは田んぼに任せればいい、というような安心が押し寄せてくるところからくるものなのです。

田植えの翌日には、もう稲は昨日とは違います。稲自身の渾身の力で体を立てようとしています。 **B** 三日もすれば、葉が色づき、伸びていて、水面に直立し、田んぼの一部になりきっています。十日もすれば、もう稲の緑が水を押しのけて、田んぼの色を占めます。田んぼの主役になるのです。この変化が百姓にはたまらないのです。この変化を生み出すために百姓は **I**

稲を育てるわけですが、ここでみられる百姓の考え方も興味深いものです。過去の歴史をひもといてみましょう。

二〇〇〇年前の中国に莊子という人がいました。彼は思想家として有名な人ですが、農業にまつわるおもしろい話もたくさん残しており、それを収めたのが『莊子』という本です。その中にもすごい百姓が登場します。

あるとき、学者が村を通りかかったら、年寄りの百姓がせつせと畑の作物に甕で水をかけていました。甕が空になると、水がわき出る井戸の底まで降りていって、水を汲んで登ってきてかけています。仕事がなかなか前に進んでいきません。しばらく眺めていた学者はたまりかねて声をかけます。

「そこのお百姓よ、さつきから見ているととても無駄なことをしているようだ。井戸の底まで降りていかに、ハネツルベという道具を使えば簡単に水を汲むことができ、仕事も何百倍もはかどるでしょう。」

すると百姓は笑って答えます。

「それくらいは、私も知らぬでもないが、そういう機械を使うと、機械に頼る心（機心）が生じて、われわれの生まれながらの心^④が失われ、作物の気持ちもわからなくなり、よく育たなくなるから使わないのだ。」

学者はさすがと退散します。《1》

これを現代におきかえて考えてみましょう。C 畑の野菜の苗にスプリンクラーで水をかけるのと、ジョウロでやるのとでは、どう違うのでしょうか。農業技術では、同じ量の水をむらなくかけるなら、作物は同じように育つと主張するでしょう。スプリンクラーを使う方が労働時間が短縮されて、百姓は楽になり、ほかの仕事ができて生産性が上がるから、こちらのほうがすぐれた技術だと言うでしょう。

それに対して、ジョウロで水をかけている百姓はこう反論するでしょう。《2》

「そういう理屈もあるだろうが、スプリンクラーを使うとそれに頼り、効率を求める気持ちが強くなって、苗に情愛を注ぐ気持ちが衰えるのが怖いからしないんだ。」

しかし、現代社会は「機心」を歓迎し、ほめたたえ、⑤ ジョウロをバカにします。「趣味や道楽ならいいけど、プロの世界では通用しない」と断定します。たしかに、現代社会を覆っている価値観はそういうものです。こういう気持ちを国民が共有しなければ、経済成長は達成できません。資本主義も発達しませんし、分業もできません。《3》

百姓はスプリンクラーをつくることができせんから、購入しなければなりません。購入するためには、お金を余計に稼がなくてはなりません。お金を余計に稼ぐためには、⑥ スプリンクラーを導入して、労働時間を節約して、その時間でほかの仕事をして、余計に収入を増やさなければなりません。こうして、百姓の自足した世界は壊れていくのです。

荘子の時代には資本主義ありませんでしたし、近代化という考えもありませんでしたが、完結した百姓の世界が壊れはじめていたのでしよう。荘子は「生まれながらの心」という言葉を使っています。東洋では、生まれたばかりのころの心がいちばん豊かで、年を経るごとに、汚れて衰えていくという考えがあります。ようするに金儲けしたい、偉くなりしたい、楽になりたいなどとい

う欲望が強くなって、汚れていくと考えたのです。「生まれながらの心」とは、そうなつてはいけないという知恵から生まれた言葉なのでしよう。

D 現代では、欲望は肯定され、欲望をあおることまで奨励されています。近代化は正しいのです。田んぼに行かなくてもコンピューター制御で灌水される技術が研究されていますし、遺伝子組み換えで本来は持ちえない性質を作物に持たせようとしています。作物が喜ぶのでなく、人間の欲望が喜ぶからです。《4》

それにしても、金儲けの気持ち薄い百姓仕事を「趣味じゃあるまいし」とか「道楽でするならいいが」と言つて軽んじるのは、最近の傾向です。ホビー農業、趣味農業という言葉まで生まれています。経営感覚がない、経営を度外視しているという意味です。お金になる世界を大事にするのは結構ですが、お金にならない世界をこんなに馬鹿にすると、わが身を苦しめることになるのではないのでしょうか。

百姓にとつて一番大切な、作物や田畑への情愛の気持ちを、お金に直結しないからといって、趣味・道楽の世界に追放したら、百姓仕事には何が残るのでしようか。百姓仕事の中のお金にならない、趣味や道楽に見える部分こそが、百姓仕事のいちばんの宝でしょう。経済しか眼中にない人には、この世界が見えなくなっているのです。《5》

ところで、もう一度荘子にもどつてみましょう。二〇〇〇年前と同じ問題で百姓が悩みつづけているのは、おかしと思いませんか。二〇〇〇年のうちにこれは解決できなかったのでしょうか。できなかったのです。これからもたぶん解決できないまま、また二〇〇〇年がたつてでしょう。

E、人間は自然のままに生きてたくても、生きられないからです。だからこそ、なおさら自然に生きたいと思ひ、悩むのです。その度し難い人間を抱きかかえて導いてくれるものこそが、自然なのです。自然に生きたいと思う心と、「機心」は、いつも自分の中でぶつかり葛藤します。だからこそ、自然の側についた思想家がいつの時代も求められてきたのです。その思想とはいつても異端にならざるをえないのはしかたがないのです。

(宇根 豊 『農は過去と未来をつなぐ』より)

問一 本文中の **A** と **E** に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ところが イ たとえば ウ つまり エ そして オ なぜなら

問二 ———— 線部① 「もともと百姓は、その理由がわかったのです」とありますが、百姓が「稲植え」と言わずに「田植え」と言った理由を筆者はどう考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 百姓は、田植えを一連の農作業の過程の中で最も労力を要する行為だと考えていたから。
イ 百姓は、田植えとは田に稲を育ててもらう準備を整える大切な行為だと考えていたから。
ウ 百姓は、自分が田に稲を植えることで、人が主体的に稲を育てることになると考えていたから。
エ 百姓は、男性が田に稲を植えることは、稲を田の神にささげる行為だと考えていたから。
オ 百姓は、田に稲を植えるという大きな一区切りになる行為を単なる農作業だと考えていたから。

問三 ———— 線部② 「田植えによって、はじめて田んぼが出現するのです」とありますが、「田植え」はどのようなものだと考えられてきましたか。その説明として最も適当な部分を本文中から四十字でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四 ── 線部③ 「百姓は田植えが終わるとほっとします」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を使って、五十字以内で説明しなさい。

問五 本文中の I に当てはまる慣用句として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 手に汗をにぎって イ 手に余って ウ 手を入れて エ 手塩にかけて オ 手を焼いて

問六 ── 線部④ 「われわれの生まれながらの心」とありますが、筆者はどのような心のことを「生まれながらの心」と言っているのですか。その説明として最も適当な部分を本文中から二十五字でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問七 本文中から次の一文がぬけ落ちています。どこに入れるのが適当ですか。本文中の ≪1≫ ≪5≫ から選び、記号で答えなさい。

これは何とさびしいことでしょう。

問八 ――線部⑤「ジョウロをバカにします」とありますが、現代社会が「ジョウロをバカに」するのはなぜですが。それを説

明した次の文の空らん当てはまる言葉を、二十字以内で答えなさい。

スプリンクラーではなくジョウロを使うと、(二十字以内) から。

問九 ――線部⑥「スプリンクラーを導入して」とありますが、筆者は農業に「スプリンクラーを導入」することに対してどの

ように考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 農業が、利益を追求し人間の欲望を満たすための道具になっていることを指摘し、お金になることばかりを重視する現在の農業のあり方を完全に否定している。

イ 人間の欲望をあおることが求められる現代社会の中で農業技術は進歩していくものの、農業分野の近代化は間違いであり、経済成長にも貢献しないものだと考えている。

ウ 人間の欲望に奉仕する農業技術の進歩は仕方ないと考えているが、お金ではかることができな価値を軽視している現代農業の未来については悲観的に考えている。

エ 今日一般的に見られる趣味農業こそが、本来あるべき農業の姿に近いものであると考え、今後の農業の未来に明るいものを感じている。

オ 人間が生まれながらの心を守るためには、農業の機械化によって産み出されるゆとりの時間が必要不可欠なものであると考えている。

問十 本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 人が自然に生きたいと願う心と、欲望のままに生きようとする心の分裂れが、自然を大切にす思想家を生むことになるが、この二つの方向の食い違いはこの先も解決されることはないだろう。

イ 荘子のような自然を大切にしようと考え思想家は今後も大切にされるだろうが、人は自分の生き方を反省することで、正しい姿にもどることも可能である。

ウ 近代的な農業の中では、田の神が人間の農業を支配するものだと考えられており、それは神に近いとされる女性が田植えを行っていたことから明らかである。

エ 農業は自然と人間の強いつながりの中での営みであり、自然への尊敬の思いを持ちつづけることで、より自然に近い形で稲作が可能になっていく。

オ 自分で機械をつくれな百姓たちが便利な機械を購入しようとするれば、お金を余計に稼ぐための仕事をせざるをえず、百姓たちの昔ながらの自足的世界が壊れていくことになる。

カ 稲をつくり、育てるという営みは今後もつづいていくであろうが、そこに存在する根本的な問題の解決をすることができない人間たちはおろかである。

【三】 次の文章は、伊集院静の『臯月』の一節です。主人公の「惇」は、父「正作」に連れられ、青煙の峠に七夕の笹を取りに出かけます。谷川の岩場に何かを見つけた正作は、惇を一人残して谷の方へ降りていきます。その時、山中で大きな岩が崖から落ちていく音が聞こえます。正作も上の岩から五メートルほど滑り落ち、岩間から生えた松の小枝を右手でつかんで宙づりになってしまいました。

本文は、それに続く場面です。以下を読んで、後の問いに答えなさい。

正作はしばらく動くのをやめてじっとしていた。惇は助ける方法を一生懸命に考えようとした。紐一つ見つかる場所ではない。すると、急に水音が惇を追い立てるようにせわしく音を立てはじめた。

正作は静かに左手を上げると右手で幹を引き寄せるようにして膝を曲げて身体を持ち上げた。メリツメリツと今度は本当に根元から折れるようなきしみが聞こえた。

しかし左手は幹に触れなかった。

動作が止まったとき、惇は正作が右手を離してしまおうのではないかと感じた。

「惇……人を、呼んで……こい。さっきの……木こり小屋のじいさんだ。すぐに行け。」

喉の奥から絞り出したような低い声だ。

「わかった。すぐ、呼んでくる。待つとれ。すぐ呼んでくる。待つとれ。」

惇は正作の目をもう一度見ると、滑るように岩を駆け降りました。勢い余ってそのまませせらぎの中に腰から落ちた。たちまち上着まですぐぬれになった。一枚岩に上ると見えない正作に向けて、

「父ちゃん。待つとれ。すぐ呼んでくるぞ、待つとれ。」

返事はない。それが惇をせき立てた。

一枚岩をまっすぐに降りると、来たはずの道はなく草と岩ばかりの場所だった。惇は崖の赤土を探した。見つからない。一枚岩を振り返って木こり小屋の方角を思い出そうとした。よく見ると覚えのある羊歯が見えた。羊歯に向かって小屋を踏み越えて走り出した。道はすぐに見つかった。惇はもう後を振り返らず崖沿いの道を必死で走った。来たときはさほど長い道のりではないと思っていた道はいくら走っても山道に出なかつた。惇は間違つた道走っているのではないだろうかと思つた。正作の背中ばかりを頼りに歩いてきた道なのだから途中で違つた方向に進んだのかもしれない。惇はちらつと青煙の頂を見た。そして走りながら崖道を振り向くと、I まがうことなく来た道だと思つた。すると頭の中に必死でぶら下がる正作の姿が浮かんだ。揺れながらたわむ細い松の木を思うと、① 肩に当たる高い草を斬るように腕を振り走り続けた。

途中、惇は二度ばかり地を這う根に足を取られてもんどりを打つように倒れた。ピシヤリと手のひらが地面を鳴らすと、ちくしように、と叫んで起き上がって走り続けた。谷底の牙をむいて不気味に正作を待っている黒い岩が後から追いかけてきた。水の入つた運動靴がキュキュウと泣くように声を出す。正作はもう手を離してしまつたのではないだろうか。そんなことはない。② 正作はそんな人ではないのだ。走りながら頭の中をめぐる恐ろしい光景を打ち消しながら、待つとれ、待つとれ、頑張れ、と声を上げた。

やがて道は下り坂になり前方からせせらぎの音が聞こえた。もうすぐ橋があるはずだ。橋を渡れば小屋はもう近い。C 惇は足の裏全体で坂道を踏みしめて下つていった。

橋は来たときよりも小さく見えた。惇は橋を渡ろうと板に足をかけた。

すると橋の中央に縄のようなものが見えた。動いている。それはこれまでに見たこともないほど大きな青大将だった。二枚の板を遮る格好で頭を惇の方角に向けて静かに身体を這わしている。惇は立ち止まつて蛇を見た。蛇は、この橋を渡さないぞ、と惇をにらみつけて頭を動かさない。惇は足が震えるのを感じた。正作の顔が浮かんだ。何か棒切れを探そうとしたがあたりには枝も石もない。ズボンを握りしめるとぬれたポケットに母のくれたキャラメルキャラメルの箱が触つた。まだ封を切っていないキャラメルキャラメルの箱を蛇に向かつて投げつけた。

が、箱は蛇を避けて空を切つて川に落ちていった。青大将は動く様子も見せず、ますます惇を見据えている。③誰かが後方で笑っている気がした。青煙の生き物すべてが惇に挑みかかっている。こんなことをしていたら正作は死んでしまう。正作は必死で待っているにちがいない。

「どけー、どけー。どけエー。」

惇は齒をかみしめ大声を出して蛇に向かって走り出した。橋は小さく揺れた。もう蛇が足首に巻きついて構わないと思った。左の足に何かはかりついている気がしたが、目もくれずに橋を駆け抜けて雑木林の上り坂を木こり小屋に向かった。

小屋が見えると惇は大声を上げて老人を呼んだ。急に涙があふれて耳や頬に走るたびに飛んでいった。

「おじさーん。おじさーん。」

小屋に着いたが先刻そこで薪を束ねていた老人の姿が見えない。小屋の戸を開けると中は暗くて何もわからない。

「おじさん、おじさーん。」

惇はどうしたらいいのかわからなくなった。老人は引きあげてしまったのだろうか。見ると束ねた薪の束の上に煙草と布包みがある。惇は声を上げて小屋の四方を呼んでみた。しかし惇の叫ぶ声だけが薄暗い林の中に響いて返ってくるだけだ。それでも何度も呼び続けた。正作はまだ右手を離さず松の木にいるだろうか。いる。必ずいる。早くしなければ。正作を思うと涙がまた流れ始めた。声がかすれてしまう。

惇は肩を震わせてあたりの音をうかがった。

すると今惇の走ってきた川のほうから人の歩く気配がした。老人の姿が映った。

「おじさーん。大変だ。おじさーん。父ちゃんが岩から落ちた。早く早く助けてくれ。」

老人は惇の様子に驚いて、

「どうした……。」

「父ちゃんが、父ちゃんが落ちた。」

「どうしたのじゃ。ゆつくり話せ、父ちゃんがどうした。」

「父ちゃんが滝の岩から落ちた。細い木にぶら下がって片手でつかまっとる。細いから、木が折れそうじゃ。おじさんを呼んでる。早く、早く、死んでしまおう。」

老人は滝の方角を見て小屋へ走ったかと思うと肩から縄をかけて Ⅲ 現れるやいなや、悼の手を取り川のほうへ下り始めた。老人は走り出すと驚くほど速かった。背は曲がっていたがグイグイと悼を引いて駆けた。橋を渡って崖の道に入ると、

「大きな岩の下だな、滝の上の。丸い平らな岩の下だな、わしは先に行く。坊は後から来い。」

老人は悼の手を離すと、どんどん遠ざかっていった。悼は遅れまいと後ろ姿を追ったが左へ曲がった崖沿いの道で老人の姿は消えてしまった。

正作はまだ無事でいるだろうか。一枚岩を出てからもうずいぶん長い時間が過ぎた気がする。それが一時間なのか三十分なのか悼はわからなかった。正作がもし谷底に落ちて死んでしまったらそれは自分のせいだ。冷たい谷底の岩の上につぶせたまま人形のように滝水にぬれている正作の姿が浮かんだ。悼は走りながら首を振ってその幻を打ち消した。顔を真っ赤に膨らませて笑っている正作が現れた。大丈夫だ正作は生きている。しかし赤い顔は笑うのを急にやめると硬直して松の幹に必死の形相でつかまっている表情に変わった。

「お願いだから助けて下さい。」

悼は誰に言うともなく叫んでいた。

走りながら何度も繰り返して助けを請い続けた。左手にそびえる青煙の頂に、正作を死なせないでくださいと願った。

岩場に近づけば近づくほど悼の中に 非情な新緑色の山の神様が襲ってきて 背中をドン ドンとたたいた。崖の赤土が切れて岩場が見えると、悼は不安に胸が詰まって息苦しくなった。

それでも足を止めないで一枚岩の下に着くと声を上げて正作を呼ぼうとした。でも黙^{だま}って岩を回り、一枚岩の上へ駆け登った。

誰もいない。

惇は声を立てず耳を立てたがあたりには何も聞こえなかった。^④急に膝と肩がぶるぶると震え始めた。耳元が熱くなり口の中が乾いた。人の気配がしない。握りしめた手が汗^{あせ}ばんで指の間をぬらしていた。

すると左の下の岩のあたりから笑い声がした。笑い声は小さく聞こえて途絶^{とだ}えたかと思うと前より大きな聞き覚えのある笑い声に変わった。正作の声だ。

「父ちゃん。」

惇は正作の名前を呼びながら声の方角へ走った。見下ろすと向かいの岩場との狭間^{はざま}、流れが落ちる場所にある岩の上に、正作は笑いながら老人と座^{すわ}っていた。

「父ちゃん。」

見上げた正作が笑って惇を見た。

「おお、惇、手をかけたなあ。」

惇は心の中で、父ちゃん、ともう一度呼んで正作を見つめ直すと、鼻の奥のほうがツーンと熱くなって喉の奥に鼻水の苦さが逆流し泣き出してしまいそうだった。でも泣くと正作に笑われる。必死になって笑おうとした。ズボンを握りしめその手で髪^{かみ}の毛を思い切り引っ張った。そして歯を見せるようにしてやっと笑うことができた。にこやかな正作の顔を見ているとこぼれそうな涙が止まった。

問一
——線部Ⅰ～Ⅲの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「まがうことなく」

- ア 何かか混じっているようには思えない
- イ どうていまねなどできそうにない
- ウ 他のものと間違えることなどありえない
- エ 少しも見づらい所のない
- オ 少しも妙みょうに感じられる所のない

Ⅱ「目もくれずに」

- ア 優しい言葉やさをかけることもなく
- イ 何の関心もなさそうにして
- ウ 冷たい視線を浴びせたまま
- エ 遠回しに皮肉を言いながら
- オ まったく脇目わきもふらずに

Ⅲ「現れるやいなや」

- ア 現れるかどうか
- イ 現れないうちに
- ウ 現れるのがいやで
- エ 現れたとたんに
- オ 現れないまま

問二 ～～～線部 a d の描写から読み取れる「惇」の心情の中で、一つだけ異なるものを選び、記号で答えなさい。

問三 ——線部①「肩に当たる高い草を斬るように腕を振り走り続けた」とありますが、このときの「惇」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 助けた父親にほめられることを期待する気持ち。

イ 自分には助けられないのではないかと不安に思う気持ち。

ウ 自分がヒーローになったような、わくわくする気持ち。

エ 父親が崖から落ちるのではないかと、とらはらする気持ち。

オ 父親を助けられるのは自分しかない、と奮い立つ気持ち。

問四 ——線部②「正作はそんな人ではないのだ」とありますが、「惇」は「正作」がどのような人であると考えていますか。説明しなさい。

問五 ——線部③「誰かが後方で笑っている気がした」とありますが、何を笑っていると考えられますか。三十字以内で説明しなさい。

問六 ——— 線部④「急に膝と肩がぶるぶると震え始めた」とありますが、このときの「惇」の気持ちを三十字以内で説明しなさい。

問七 この文章についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 困難に打ち勝ちながら成長していく「惇」の様子が、山の神様の視点から描^{えが}かれている。
- イ 事故にあった父親を助けようとする「惇」の懸命な姿が、緊張感^{きん}をもって描^{えが}かれている。
- ウ 山中の事故を通して成長していく「惇」と、それを見守る大人たちの様子が描^{えが}かれている。
- エ 次々とおそいかかる逆境を乗り越える「惇」の冒険^{ぼう}の様子が、ユーモアを交えて描^{えが}かれている。
- オ 事故にあった親子を通して、あらがうことができないう大自然の恐ろしさが描^{えが}かれている。

【問題はこれで終わりです。】

--

問一	問二
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	⑧

問二	問一
①	A
②	B
③	C
④	D
⑤	E

【二】

問二	問一
①	A
②	B
③	C
④	D
⑤	E

問三	問二
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

問四	問三
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	⑧

問五	問四
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

問六	問五
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

問七	問六
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

問八	問七
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	⑧

問九	問八
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

問一	問十
I	①
II	②
III	③

問二	問九
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

問四	問三
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

問五	問二
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	⑧

問六	問一
①	I
②	II
③	III

問七	問六
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

【三】

スプリンクラーではなくジョウロを使うと、

から。

【一】(26点)

問一	① 弁護士
⑤ 招待	② 複製
⑥ 夢中	③ 直ち
⑦ 功罪	④ 横暴
⑧ 質疑応答	④ 横暴

(各2点)

問二	① ア
② イ	③ イ
④ ウ	⑤ エ

(各2点)

【二】(46点)

問一	A ウ
B エ	C イ
D ア	E オ

(各2点)

問二	イ
----	---

(4点)

問三	百姓が田んぼもらう儀式
----	-------------

(3点)

問四	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>心</td><td>立</td><td>稲</td></tr> <tr><td>が</td><td>ち</td><td>を</td></tr> <tr><td>押</td><td>、</td><td>田</td></tr> <tr><td>し</td><td>あ</td><td>ん</td></tr> <tr><td>寄</td><td>と</td><td>ぼ</td></tr> <tr><td>せ</td><td>は</td><td>に</td></tr> <tr><td>る</td><td>田</td><td>植</td></tr> <tr><td>か</td><td>ん</td><td>え</td></tr> <tr><td>ら</td><td>ぼ</td><td>る</td></tr> <tr><td>。</td><td>に</td><td>と</td></tr> <tr><td></td><td>任</td><td>、</td></tr> <tr><td></td><td>せ</td><td>自</td></tr> <tr><td></td><td>れ</td><td>分</td></tr> <tr><td></td><td>ば</td><td>の</td></tr> <tr><td></td><td>い</td><td>手</td></tr> <tr><td></td><td>い</td><td>か</td></tr> <tr><td></td><td>と</td><td>ら</td></tr> <tr><td></td><td>い</td><td>稲</td></tr> <tr><td></td><td>う</td><td>が</td></tr> <tr><td>安</td><td></td><td>巢</td></tr> </table>	心	立	稲	が	ち	を	押	、	田	し	あ	ん	寄	と	ぼ	せ	は	に	る	田	植	か	ん	え	ら	ぼ	る	。	に	と		任	、		せ	自		れ	分		ば	の		い	手		い	か		と	ら		い	稲		う	が	安		巢
心	立	稲																																																											
が	ち	を																																																											
押	、	田																																																											
し	あ	ん																																																											
寄	と	ぼ																																																											
せ	は	に																																																											
る	田	植																																																											
か	ん	え																																																											
ら	ぼ	る																																																											
。	に	と																																																											
	任	、																																																											
	せ	自																																																											
	れ	分																																																											
	ば	の																																																											
	い	手																																																											
	い	か																																																											
	と	ら																																																											
	い	稲																																																											
	う	が																																																											
安		巢																																																											

(5点)

問五	エ
----	---

(2点)

問六	百姓にとつゝ愛の気持ち
----	-------------

(4点)

問七	≧5≦
----	-----

(4点)

問八	スプリングラーではなくジョウロを使うと、 労働時間が長くなるの ため、生産性が下が るから。
----	---

(4点)

問九	ウ
----	---

(4点)

問十	ア
----	---

(オ)

(順不同、各3点)

【三】(28点)

問一	I ウ
II オ	III エ

(各2点)

問二	c
----	---

(3点)

問三	オ
----	---

(3点)

問四	簡単にあきらめない、がまん強い人。
----	-------------------

(3点)

問五	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>こ</td><td>父</td></tr> <tr><td>わ</td><td>を</td></tr> <tr><td>が</td><td>は</td></tr> <tr><td>る</td><td>や</td></tr> <tr><td>惇</td><td>く</td></tr> <tr><td>の</td><td>助</td></tr> <tr><td>無</td><td>け</td></tr> <tr><td>力</td><td>な</td></tr> <tr><td>さ</td><td>け</td></tr> <tr><td>。</td><td>れ</td></tr> </table> ば な ら な い の に 、 蛇 を	こ	父	わ	を	が	は	る	や	惇	く	の	助	無	け	力	な	さ	け	。	れ
こ	父																				
わ	を																				
が	は																				
る	や																				
惇	く																				
の	助																				
無	け																				
力	な																				
さ	け																				
。	れ																				

(5点)

問六	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>安</td><td>父</td></tr> <tr><td>に</td><td>は</td></tr> <tr><td>思</td><td>も</td></tr> <tr><td>う</td><td>う</td></tr> <tr><td>気</td><td>死</td></tr> <tr><td>持</td><td>ん</td></tr> <tr><td>ち</td><td>で</td></tr> <tr><td>。</td><td>し</td></tr> <tr><td></td><td>ま</td></tr> <tr><td></td><td>っ</td></tr> </table> た の で は な い か と 、 不	安	父	に	は	思	も	う	う	気	死	持	ん	ち	で	。	し		ま		っ
安	父																				
に	は																				
思	も																				
う	う																				
気	死																				
持	ん																				
ち	で																				
。	し																				
	ま																				
	っ																				

(4点)

問七	イ
----	---

(4点)

平成二十八年年度

和歌山信愛中学校

入学試験 後期日程

作文（五〇分）

受験上の注意

- 一 問題用紙の他に、解答用紙、下書き用紙があります。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、すべての用紙に記入しなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙と下書き用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

問 次の文章を読んで、あなたの感じたことや考えたことを六百字以内で述べなさい。

なにか新しいことを始めるとき、多くの人はまず成功例に学ぼうとする。これは当たり前のもので、すでに成功している手本を真似ればそれで万事うまくいくような気がするから、そうするにちがいない。ところが、現実にはそのようなことはほとんどあり得ない。成功例を真似ることで一時的にうまくいくこともあるが、たいていの場合やがて想定外のことが起こって最後は必ずダメになるのがオチである。

成功例に学ぶというのは一見すると誰の目にも賢いやり方に思えるはずである。それなのになぜうまくいかないのだろうか。その理由は簡単である。お手本を模倣することでうまくいくと考えている人の多くは、やがてそれ以外の方法について「見ない」「考えない」ようになる。さらには、よりいいやり方を探し求めることまでやめて「歩かない」ようになるが、その一方で時代は常に変化しているので、あるときの「いいやり方」がいつの間にか「ダメなやり方」に変わることが必ず起こるからである。

いま日本中のあらゆるところで起こっている問題は、根っこの部分にすべてこの「見ない」「考えない」「歩かない」があるように私には見える。この姿勢を改めないかぎり、なにをやってもうまくいかないし、成功を持続させることはできないにちがいない。とくにいまは、世の中の変化のスピードも速くなっている。これではいいお手本に学んでも一時的な成功さえ得られないかもしれないし、現実にはいまの社会はそうなっているように見える。

この問題を克服するには、「現地」「現物」「現人」を心がけるしかない。これは要するに、先ほどの「見ない」「考えない」「歩かない」と真つ逆さまの生き方である。結局のところ、その人が意欲を持って現場に足を運び、そこで現物を直接見たり現場にいる人の話に真摯に耳を傾けなければ物事の本質は見えない。つまり、なにかしらの目的意識を持った人が、実際の体験の中で自分自身でなにかを感じたり自分の頭で主体的に考えることこそが大事で、そのように行動している人だけが、どんな状況にも柔軟に対応できる本当の知力、本当の知識といったものを体得できるのではないだろうか。じつはこれが、失敗学の根本にある考え方でもある。人間がなにか新しいことをしようと行動すれば、その結果はまずまちががなく失敗に終わる。しかし、その失敗自体は悪いことではなく、その経験の中で自分が見たこと、感じたこと、考えたこととは必ず次に役立つ。このとき一番まずいのは、失敗に懲りて挑戦自体をやめてしまうことである。そうすることでたしかにその人は失敗することもなくなるが、同時に自らが進歩するチャンス、成長するチャンスも失ってしまうことになる。

(畑村 洋太郎 『失敗学のすすめ』による)

